

読書指導、していますか？

元新宿区立西戸山小学校教諭
やすだきょうこ
安田恭子

楽しい読書指導を

わたしの学校では、図書館利用の割り当てが決まっているから、そのときに、子どもたちを図書室に連れて行って、自由に本を読ませているんだけど、これって読書指導じゃないのかしら？

Q ぼくは、読書の記録を大事にした
いから、「本の貯金通帳」という記録
ノートを作って、読んだ本の書名や
作者名、出版社、一言感想などを書
くようにしているんだ。
でも、この前、子どもたちから、「先
生、どうして感想とか書かなくちゃ
いけないんですか」って聞かれて、
答えられなくて……。



A 読書嫌い、活字離れ等が話題となるずつと前から、多くの先生方が「何とか子どもたちに読書の習慣づけをしたい」とさまざまな工夫をしながら、読書指導に取り組んできました。

ところが、先生方が懸命になればなるほど、子どもたちが読書から遠ざかってしまっていることがあります。これは多くの場合、熱心さのあまり、子どもたちに多くの課題を与えてしまったためです。
読書でいちばん大切なことは、**本を楽しむ**。
今までの読書指導を振り返り、よりよい指導のあり方を考えてみましょう。



図書館指導と間違えていませんか？

読書指導をしていますか、と聞かれると、「わたしは大丈夫。ちゃんと図書室に連れて行って、部屋の使い方の指導もしているから……」と答える先生がいますが、これは違います。読書指導ではなく、図書館指導といふべきです。

読書指導で大切なことは、児童一人ひとりが多様な読書活動を通して、幅広い分野に興味関心をもつこと。知識をもつに思考力・判断力を育てること。さらに、読書の習慣を作り、児童自ら、読書生活を充実させ、情報活用力を育てることです。ですから、読書指導も言語活動の一つとして、低学年から高学年にステップを考えて指導しなくてはなりません。

低学年では

できるだけ多く、読書にふれさせることが大切です。本にふれさせ、本に親しみがもてるようにしましょう。

■読み聞かせ

読み手は先生に限らず、さまざまな人が行うとよいでしょう。

■交代読み

一ページや段落ごとに交代して読む（ペア・グループ・クラス全体）と、飽きずに続けられます。



中学年では

本を読むことで知識を増やしたり、情景や心情を思い描いたりすること、さらに比べ読みや調べ読みもさせましょう。

■比べ読み

・同じ題材でも違う作者の作品を比べます。

・一人の作者のさまざまな作品を比べます。

■調べ読み

調査・報告・伝達等のために読みます。読んで必要な情報を整理します。



高学年では

自ら求めて読書するとき、何のために読書をするのかを考え、自分と読書をしっかりとつなぎながら、自分を深めさせましょう。

■読書マップ作り

読んだ本を記録しながら、自分の読書を見つめます。

わたしの読書マップ			
		科学	読書マップを見て気づいたこと
	物語	物語	・物語の中でもファンタジーが多い。
ドキュメンタリー		物語	・少し科学物にも目を向けよう。

読んだ本の書名・作者名（できれば一言感想も）を書き、枠で囲む。枠はジャンルごとに変える。

■成長期の記録
一か月、一学期等を一区切りに、大きめの紙（B4用紙等）に記録していくとよいでしょう。

本を読むたびに、自分に何を与えてくれたかを書き、自分を見つめる心を積み重ねていきます。

楽しい読書指導を 実践するために

1 きっかけを 上手に与えよう！

子どもの実態に合わせて、本を選びましょう。きれいな色の本、表紙が虫の本、へんな顔の本、一見難しそうな本、等々。さらに、置いておく、開いておく、黙って読む、読んで聞かせるなど、いろいろ工夫しましょう。

2 場の工夫を！

「読みなさい」と放っておいても、読む子にはなりません。教室の片隅にラグマットを置いたり、オープンスペースに読書コーナーを作ったり、立ち読みコーナーをわざと作るのもおもしろいです。

3 時間の確保！

学校生活の中のさまざまなすき間の時間をうまく使いましょう。朝、給食の前後、下校前、等々。先生もいっしょになって、5分読書、10分読書をするのはどうでしょう。

4 活用こそ力！

子どもがどんな本を読んでいるかを、時折把握しておいて、先生のお話や授業中に「〇〇さん、この前、ありの本を読んだでしょう。それに行列ができるわけがなんて書いてありましたか？」などと問いかけてみましょう。読んだ本が役に立つことに、子どもは喜びを感じるでしょう。



読書活動は、できれば日常的に活性化し、充実してほしい言語活動の大きな柱です。
特に学校では、日ごろ、子どもたちに接する先生方がどんな本に関心をもち、どんな本の話をしたり、紹介をしたりするか、さらに子どもたちが読んでいる本をいかに共感的に受け止めているかなど、教師の役割が大事になります。
先生方がアンテナを高くして、多彩なジャンルの本に接し、より多くの情報を子どもたちに提供していただくことが、楽しい授業の一步となるでしょう。

手にしている本を ほめること

「読書が好き」を育てる手軽な方法がある。手にしている本をほめるということである。

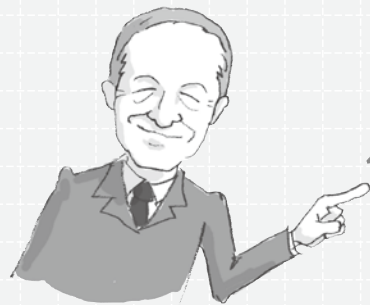
Aさんは意地悪が好き、トラブルにかかわることが多く、読書には関心がない子とされていた。そのAさんが、「読書が大好き」と言うようになった。きっかけは図書館。

「Aさん、新しい本が入ったよ。あなたは力がある子だから、読んでごらん」と、薦められたこと。書名は『論語』。下校の途中、手にしている本の題名を見た近所のおじさんに、「賢い子だね。難しい本を読むのだね」と、声をかけられた。その日、「力がある・賢い」の言葉にいい気分になったAさん。手強い本と思いながらも、『論語』を読み通した。その後も読書に集中するようになった。気がついたら、意地悪やトラブルの噂も聞かなくなっていた。あり余るほどのエネルギーを読書に注ぐようになったからだろう。

読書の始まりは、ちょっとしたいい気

「読書が好き」を育てる

よしなが こうし
京都女子大学教授 吉永幸司



分にさせること。手にしている本をほめることと勝手に理解して試みている。成功率は高い。

読書する子がまぶしい と思えること

「読書が好き」を育てるには、子どもの環境をしっかりと見定めることである。

最近の小学生は多忙である。スポーツ教室やお稽古ごと、塾などの拘束時間で、自分の時間が少ない。テレビやゲーム、携帯電話やパソコンなど、やりたい遊びの種類も多い。また、なかには、物と心、両面においてゆとりがない家庭もある。このような環境では、「本をたくさん読みましょ」と、指示をすれば、子どもが素直に読書をするというよう甘さはない。

そうだとすれば、「このような環境なのに、読書をする時間を見つけている」「読書に心を向けている」ことが立派であるというように見方を変える。すると、読書をする子がまぶしく見えてくる。当然、愛さ

本の内容を 子どもと楽しめること

「読書が好き」を育てるには、本の内容を、子どもと一緒に楽しめることである。

そのためには、子どもが読んでいる本を知ること、読むことである。「図書館で、子どもが手にしている本をそっと見るのが楽しい」と思えたとき、子どもとの心の距離は近くなっている。テレビやゲーム、遊びの話をする。そのエネルギーを、読書から得た感動や感想や感動を伝えたい気持ちに向けさせた。よき聞き手になるためにも、子どもの本を読むことである。教師になつてよかったという快さを感じるときである。